

文化財 やまと

大和村文化財保護協会発行



七鈴五獣鏡

なに気なく、通り過ぎようとして、ふと心ひかれるのが路傍の石仏である。素朴な面持(おももち)に、慈悲心が感じられるのは、道を通る人々(昔は方言でカイドトオリといった)の安全を願う建立者や石工の祈りの心が背後にあるからだろう。歩岐(ほき)や峠の石仏——地藏様や観音さまを拜んで歩きつづけた昔のカイドトオリの旅は、今の人たちの想像もつかないほどの苦勞もあつたらうが、また一面、心のゆとりもあつたに違いない。難儀でもあつたが、神仏の加護とそれを信じる素直さがあつたからである。

ところが、近年は道路事情が変つて来た。曲りくねつた道は、直線化され、舗装が山奥の在所にまで行渡り、そこを滑るようにクルマが走る。カイドトオリで道のにぎわつたことなど、まるで昔の夢である。

こうした時勢に押されて、路傍の石仏たちも、思いがけもない場所へ移されたり、あるいは道路のつけ替えで置き去りにされたりして、今ではだんだん影の薄い存在になつてきた。

越前街道から県道へ、そして国道へと、ここ一〇〇年ばかりの間に、道路もずいぶん變つてきた。かりに、いま国道一五六号線沿いに旧道の跡をたどつてみると、何と道筋の多いことか。それらの多くは、昔のカイドトオリが歩いた歴史の道の痕跡(こんせき)である。

道は歴史と文化の象徴である、と思うので、本誌は第四号以来、「道」の記録を連載してきた。も

路傍の石仏

会長 野田直治

う一度ふり返つてみると、

第4号 越前街道(徳永区内) 木島 泉

第5号 牧の道 土松 新逸

第6号 内ヶ谷への昔のみち 有代 信吾

本号 大間見の道 日置 繁

右のような次第である。これらみな単なるリポートではなく、執筆各位の道路観といったものにじみ出ている興味深い。できれば、これを全村に及ぼしていき

いと思うので、会員諸氏のご協力をお願いする次第である。

時の流れにつれて、石仏の影がうすれて行くと思いが、初めてこれを建立した昔の人々の苦勞は一通りではなかつたと思われる。その一例として、観音堂山の観音さまの建立については、次のようないきさつがある。

場所は剣区と口大間見の境界にある山の南端、通称「観音堂山」である。この山の中腹に「観音堂古跡」があり、現在もりっぱな礎石が並んでいる。その一角にトタンぶきの小さな堂を建て観音菩薩をまつてあるが、もちろん後世のものである。

ところで、この観音堂を中心にして剣の矢田平(やだひら)から上り、大間見字横地(よこち)へ下りる参道に一番から三三番まで三体の観音の石仏が並んでいる。

年九月で、寄進者は地もと住民をはじめ遠くは上有知(こうずち||美濃市)、北方は「長龍寺連中」(白鳥町)などである。その開眼供養は同年一〇月九日、八幡町の慈恩寺和尚を導師に招いて盛大に行われた。ところが、これですんなりと開眼できたわけではなかった。供養の翌日、郡代役所から代官に對しきつい通達があつた。それは観音建立の願書に、二体とあつて許可したのに、実際はもっと多数あつたというが、至急実情を調査せよというのである。このとがめは嚴重で、剣・大間見の両庄屋の陳謝も聞き入れられず、一〇月二三日、両村三役人が呼び出され白州(しらす)で罰金三ツメ文、観音は二体の外、全部ふもとへ撤去せよという敕命を受けた。そして同二八日、検分の役人が出張して、始め許可を受けた二体以外の観音はいちおう山麓へ下ろさせられた。

その後、現在の位置にもどされたが、それがいつだったか記録がないので分からない。

路傍の石仏にも、いろいろと歴史と文化の跡がうかがえるものがある。

教育と

文化財保護

森藤 幸

教育の荒廢が叫ばれ出してすでに久しい。

上は大臣から下は村のPTAに至るまで、教育の大事さを論じ、国や地方自治体は教育費に龐大な投資をして教育を守りそれを振興させようとしているのに、大事にすればする程その結果は逆で、子供も社会もいよいよ悪くなるばかりのように思はれる。

このいわゆる教育の荒廢を最近世の識者達は「物が豊かになり過ぎて心が失われたため」だといひ出した。むろん原因はこれ一つだけではなく、ほかにも色々あるだろうが、大きな要素であることに間違いない。

亡くした心を取り戻しそれを豊かに育てるにはどうしたらいいか。おそらくこれにも幾多の方法はあるだろうが、まず第一に大事なことは教育の原典にかえることだと思ふ。

教育ということを広辞苑で見ると「教養を授けること」とある。また国語辞典で見ると「知識を個人人の能力を伸ばすためのいとなみ」と出ている。

現在学校を主にした教育は非常に高度になっている。しかしそれは教育の技術や方法であつて、ただ知識を与え能力を伸ばすことのみ重点がおかれ、教養育てるということが、学校でもまた家庭でもなおざりにされているのではないだろうか。「人間を教養育てる」という原点から始めない限り、いくら学校に専任の生活指導教員を配置して見ても、また公民館や教育施設を立派にしても、子供は良くなならないし、まして社会の浮化などということは「百年河清を待つ」に等しいことだ。

社会学者清水幾太郎氏は「教育」ということをミニマムに定義すると、それは年少の人間に民族の文化的遺産を伝達する仕事」だといっている。ミニマムを「最少限」と解して最少限に凝縮された定義とすれば、それは日本民族の古くて立派な有形無形の文化財を正しく受けついで確実に次代に伝えることだといったら、あまりに文化財保護を意識し過ぎたこじつけだ

とのそしりを受けるだろうか。現在のあらゆる面での荒廢の原因を端的に云えば、それは敗戦を機に価値観の変動を理由とし、また民主主義に名を藉りて、神話を否定し、教育勅語を追放し、家族制度を破壊し；等々にあるといいたい。これは敗戦による占領政策に迎合するあまり（表面的には米国の命令であつたが）良きも悪きも見境なく古いものを捨て去つたことへの罰だとも思う。

アメリカでは戦前から日本の古い家族制度を研究しそれを採り入れて、ソ連では日本の教育勅語を研究しその徳目を道徳教育に採用している、中華民國では日本の明治維新を研究しその精神を青少年教育の教材にしている等々のことを聞いているが、本家本元の日本の現状ではこのことをどう観

どう考えるべきだろうか。こうした世相に対する反省が反動か知らないが、近年歴史に関心が持たれ始め、また文化財というものに脚光を浴びるようになって来た。それは大変よろこばしいことであるが、しかしどうかするところであるが、歴史の追求は暴露趣味的な興味本意であつたり、また古銭が発掘さ

れるとすぐその金銭的価値を考へたり、古い壺が出土したといへば形が良いとか焼が見事だとかいふような、文化財といつても単なる骨とう品愛好趣味だつたりという骨とう品愛好趣味だつたりという骨とう品愛好趣味だつたりといふようなことに墮しはしないかとおそれる。

大和村には国宝や重文はないけれども貴重な遺跡や文化財が多数ある。今年最後の年になる三ヶ年計画で発掘中の牧字篠脇の東氏居館跡の庭園の遺構は岐阜県内では勿論日本としても他に例の少ない立派なものだといふ。この遺跡発掘については当初は種々批判もあったが、幸い地元の方達や村当局の深い理解と厚い協力によって順調に進められている。特に発掘計画地の付近に設計され、すでに施工中の県道路線が他え変更されて、遺跡を傷つけることなく十分な発掘調査が出来るようになったことは、文化財保護のため、まことにありがたいことである。関係各位に対して心から敬意と感謝を捧げるものである。このことはまた文化財というものがかいかに貴重なものであるか、またこれが保護のためには或る程度の犠牲も払わなければならないものだといふことの

証明である。このほか美濃地域で最も古いとされている福田古墳、堂々たる大博物館でもなかなか見られないような七鈴五獸境、野口区小淵で出土した金文字入りの五輪塔の一部、その他、村の広報や本誌で照会されつゝある多数の文化財があるし、なお今後も相当の出土が予想されている。

これら数多くの文化財は、先人から与えられた貴重な遺産として、さらにまた誇りあるわが村の歴史そのものとして完全に受け止め、後代に伝えなければならぬと思ふ。それは文化財保護法にいう「文化財は貴重な国民的財産」であることの理解であると共に、文化財保護は国民として「誠実に協力しなければならぬ」という義務でもあるのである。

そして同時にまた、教育の重要な任務の一環であると思ふのである。

木島 泉

ひと処野火を追ひゆく風となる
泣き虫の空へ呆けて翔ぶ柳

額の芽やあへば言葉が突がりだす

八幡信仰と

牧山田の八幡神社

畑中浄園

周知の如く、八幡信仰のはじめは大分県宇佐におこった村落的な信仰で、若宮とよばれるように、小児の形をした神への信仰であり、また農耕的な性格もあわせもっていた。その祭礼には数多くの旗を立てたので「八幡」の神といわれるようになったという。また一説には帰化人秦氏の守護神であったため「秦(幡)神社」といったという説もある。



八幡神社 御神体

宇佐地方に銅が産出するようになると鉢産の守護神ともなった。かの奈良の大仏鑄造に際して、ここで産出した銅が多量に使われたことから、東大寺の守護神として勧請され、手向山八幡宮が造営された。このことは当時の神仏習合(神と仏が折衷調和する)の考えをさらに前進させたものとして注目される。すでに奈良朝以前に宇佐八幡宮に別当寺(宮寺・神宮寺などともいう)があったことが最近明らかされたので、この宇佐八幡宮が神仏習合の元祖と考えられる。奈良朝以後は寺が一般に神社に付属して建てられ、神も仏の教えを喜ぶという考えから社僧(別当)が神前で読経をし、神社の祭礼を仏式で行うようになった。平安時代に入ると八幡神に朝廷から菩薩号が与えられ八幡大菩薩と唱えられるようになった。このことは、仏や菩薩がかりに神の姿となつて日本に現れた(権現)という本地垂迹の考えに発展してゆく。そうして、本地である阿弥陀が衆生済度のため菩薩となつてかりに神の姿をとつて現れたのが八幡神であると考えられるようになった。このように八幡神は、神仏習

合からさらに本地垂迹の考えに発展するさきがけとなつたわけである。そうして僧形の八幡神像も造られるようになった。京都の神護寺には弘法大師が描いたという僧形の八幡神の影像があつたといわれるが、彫刻では東大寺の僧形八幡像(鎌倉時代快慶作)がとくに有名である。

貞観二年(八六〇)八幡神が京都の石清水に勧請されたところから祭神は応神天皇に結びつけられ、天皇の母神功皇后と天皇の妃冲津姫の三体が祭られるようになった。八幡信仰はこのような歴史をもち、さらに後世には武の神として多くの影響をのこしたのであるがそのことについては紙面の都合で省略し、本村牧の山田にある八幡神社についてのべよう。

牧の明建神社をすぎて三日坂をこえ少し行くとすぐ左手の山麓にこの八幡神社がある。社殿は正面一二四cm、側面は一五五cmの小堂で、堂内にはさらに二重の垂木で屋根を造つた厨子があり、その中の前面に八幡神の座像がある。台座は高さ五cm、横二〇cmで、王朝の貴人の座を示す赤・緑のタテ線が描かれている。像の高さは二八

cmで色彩のあざやかな直衣(天子・摂家・大臣など高貴の人の通常服)をつけ、頭には冠を、左腰には太刀をはいた姿である。これがすなわち八幡大菩薩像であることが次のような台座裏の銘文によって知られる。

天保十五年 発願主遠藤伝四郎六元 總氏子中
奉彫八幡大菩薩尊像一
八月朔日 作者和良中之保住 右京

これについて「万留帳」の天保一五年(一八四四)の項(大村史稿)に、

同月(七月)下旬、当村山田八幡宮の尊体彫刻出来。同二九日神輿奉上げ候、前立勸請可致由の神輿下り、八月朔日開眼供養仕候なり。尊体は応神天皇様御姿。発願主当村遠藤伝四郎忠六作者和良村中之保住山伏右京。開眼供養導師、栗飯原武造常流右尊体台座に記し置く。

とあって、この像の由来がわかり台座裏の前記の銘文も栗飯原常流が書きのこしたことが知られる。そうしてこの前立(神体の前に安置する像)が八幡大菩薩であり、その姿は応神天皇であることが分かる。

この前立の後ろに横に並んだ三

体の座像がある。このような三体形式は古く平安朝初期にさかのぼることができ、奈良薬師寺の鎮守八幡宮の三体神がそれである)この三体の像はいずれも台座の高さ三、四cm、横一四cm、像の高さ一六cmの小像である。色彩は退色しているが彫りは古拙で素朴、顔面・首・手には金箔がおかれている。各々には頭光背(頭の後ろにある光背)があり、それは濃紅色の内輪と黒色の外輪が二重になった太い光輪背で、各光背とも三つの火焰輪光がついている。この三尊の中央が八幡大菩薩すなわち応神天皇で烏帽子直衣姿、その左右は天皇の母神功皇后と天皇の妃冲津姫である。この二体は円頂納衣(頭をまるめ、法衣を着る)の比丘尼の姿で、しかもその跪座(ひざまずいて座る)の姿は日本的でかつ女性らしさを表現している。また三体とも胸のあたりで合掌した敬けんな姿であるが、このような合掌印をもつ神像は非常に珍しい例である。造像の年代は不明であるが、恐らく近世初頭の作ではなからうか。ところで八幡大菩薩と称せられる菩薩の称号と、これらの像の姿は符合していないのはどう解すべ

きであろうか、「内に菩薩の行を秘し、外に比丘の相を現ずるのは神もまたかかる姿をもって仏に仕え、解脱への道を求める菩薩である」(『仏教の歴史』)という解釈もあるが、元来、仏には応化身といつて、時と所と衆生に応じてその身を種々の形に示現するものといわれていることから考えて、造像の儀軌(法則)から離れて自由な形態があっても不思議ではない。

古代におこった本地垂迹の思想は、その後民衆の中に定着して、近世末まではほとんどの神社には仏像が安置されていたのであるが明治初年の神仏分離と廃仏棄釈によって仏像は他に移されたり廃棄されてしまった。そうしたなかでこの山田の八幡神社がよく原形をそのままに残していることは注目しなければならぬ。

村内には八幡社はこの外、福田の若宮八幡、野口の弓矢八幡、大間見の八幡神社、万場三島家の八幡社があるが、これらについては機会を得ればのべることにする。

なお本稿の内容については、当社の称宜遠藤東男氏のご厚意に負う所が多であったことを付記しておん礼申し上げる次第である。

東氏居館跡の

発掘調査

土松新逸

東氏居館跡は、昭和五四年六月牧区のは場整備工事中に見え、翌五五年から三ヶ年計画で県文化課の指導の下に進められております。

この発掘調査事業は、大和村にとつて全く思いがけないことでありましたが、幸い各関係者の格別のご協力できつと進められております。しかも出土品が、中国南宋



東氏居館跡庭園遺構実測図

時代(二世紀)の青磁・青白磁の破片、瀬戸系天目茶碗や灰釉陶器の破片、その他おろし皿や燈火用の皿または北宋時代の宋銭など、東氏の日常生活が非常に高級で文化的であったことをうかがえるものが多く、たいへん有意義なことでありました。そのうえ、発掘調査地の西南部にて検出された庭園遺構は1m以上の地下に埋まっていたので、その池汀部の石組がほとんど破壊されることなく残っており、一八八平方mの池の全貌が出現してとても立派なものであります。

永祿二年(一五五九)八幡赤谷山にて滅びるまで一代三三八年間郡上郡山田庄を統治しましたが、最初の九〇年間を剣の阿千葉城に、最後の一八八年間を赤谷山城にいたした。この篠脇城跡のふもとに居館跡が今回復掘調査されているわけがあります。

その一つは、応仁二年(四六八)美濃の守護代齊藤妙椿の来攻であります。この時は篠脇城は落城し、城主氏は氣良へ逃げて、山田庄は妙椿に奪われたのであります。もちろん居館は全部焼かれたことでしょう。幸い常縁の歌を妙椿へ贈ることによって領地をとりもどすことができ、戦乱にて壊された城下を復旧し、東氏は再び栄えましたが、それから七二年後の天文九年(一五四〇)に越前の朝倉勢が郡上に侵入して、篠脇城下は再び戦乱のちまたになりました。この戦いは、最後には篠脇城の「臼の目掘」といわれる独特の築城(たて堀)を利用して敵軍を敗退させたのであります。恐らくこの戦いにおいてもこの居館はめっちゃめにされたことでしょう。戦いの常として、城まで攻め登る前に居館は焼き払われたことでしょう。戦いがすすんでから、時の城主常慶はここを復旧することなく、翌天文一〇年に八幡赤谷山城へ移り、この篠脇城は廃城となりました。この居館跡も破壊されたまま放置され、その後は荒れるにまかせてあったことと想います。

昨年七月には京都博物館考古学室長八賀晋先生が、八月には岐阜大学教授野村忠夫先生が、そして九月には文化庁の牛川調査官が、さらに一月には奈良国立文化財研究所の加藤允彦先生と日本庭園文化研究所次長村岡正先生がそれぞれ発掘現場へ来られ、この庭園遺構のすばらしさに驚いておられました。京都にも寺院の庭園は相当地に遺っているが武將の居館跡の庭園は遺っておらず、全国でもあまり例を見ない貴重なものであるとのことでした。

東氏は、承久三年(一二二二)下総国(千葉県)から来郡以來、二度の大きな戦いがありました。

東氏は、承久三年(一二二二)下総国(千葉県)から来郡以來、二度の大きな戦いがありました。

の至る所から焼けた木材や炭が出
土し、柱の焼け残りや、土石にも
焼けた跡がはつきりとわかる所が
多いことから推察できます。ま
た、庭園遺構池の部分の土層を見
れば、池底面の約五cmは植物の
堆積層で、ここからは木の葉や実
さやの完全な形のものを見るこ
ができます。その上二〇〜三〇cm
は粘土層であり、その上二〇〜三
〇cmは細い砂（粘土に近い）の層
になっています。そして右自然の
堆積層の上へ三〇〜五〇cm位土を
入れて耕地にした様子がよくわか
ります。

これらのことから考えてみます
と、篠脇城が廃城になってから今
日までちょうど四四〇年になりま
すが、この土地が耕地化されたの
は江戸時代からと推定されますの
で、恐らく一五〇〜二〇〇年の間
荒れ放題になっており、その間に
草や木の葉が堆積し、その上へ土
砂が流れ込んで粘土の層や砂土の
層ができたものと思われれます。こ
の土地が耕地化されたころは、こ
の一带は沼地状態だっただろうと
想像できます。このことは土壌学
の上からも貴重な資料ではありま
せんでしょうか。

この東氏居館跡の発掘調査は、
昭和五十七年度も引き続き行われま
すが、中世文化史上の貴重な資料
が私たちの身近にあることに心し
て、この重要な文化遺産をみんな
の力で護ってゆきましよう。

大間見の道

日置 繁

大間見の地区は、南北に開けた
細長い地形をしており、大間見川
が小間見川を合せて南下し、部落
を東西に分けている。そのため
大間見川に架かる橋は、清水作衛
氏所蔵の古文書（昭和四十四年）にあるよう
に、大野口橋・藤子橋などをはじ
めとし、その数二〇箇所に及び、
地区民はその維持管理には大変苦
労したものである。

この長大な大間見地区の大動脈
である広域農道（大間見地区）は、地区
民の大きな期待をになって、昭和
四八年度に大和村中学校の南際で
国道一五六号線を起点として着工
し、白鳥町を経て高鷲村蛭ヶ野に
至る、幅員一〇m（内歩道二m）
総延長三八km、総事業費三八億円
余の遠大な計画のもとに、関係地

区の圃場整備事業と並行して、継
続施工せられて来たが、大和村の
区域内の未成区間は二カ所約二・
六kmを残すのみとなり、白鳥町地
区未成区間約一kmを含めて、これ
が完成すれば産業文化の発展が、
いつそう大きく期待できるわけ
である。

広域農道は一部元道を（旧道）を拡幅する
ところもあるが、大半は新規に農
地をつらぬいて理想的な線形が整
っている。このため部落によって
は従来の県道が村道に移管される
区間も生じた。かくて地区として
は世紀の大変貌を遂げんとすると
き、静かに大間見の道の今昔を考
えて見たいと思う。

この地区からは、先年の圃場整
備で多数の縄文遺跡（縄文・大塚・円）が
発見されて、古くからこの里に古
代人が住みついていたことが明ら
かになった。
「古代の道」それは工作したもの
ではなく、足跡が自然の道となり、
川は飛び越えや丸太の投げ渡しで
けもの道さながらであったであ
らう。この道は近郷部族との交流
や、石器など猟具の入手のために
遠くは下呂の小川や信州の和田峠
にまでも尾根つたいの道があった



大間見村の昔の道

ようである。このことは出土する
石器の素材である小川石や黒耀石
などから証明されるところである。
近代の「道路」として建設せら
れたものは、まだ日が浅く、現在
の四m道路も今から約五〇年前に
幅三mから四mに拡げられたもの
で、ちようど越美南線が弥富駅ま
で開通（昭和七年）した直後であ
った。その頃私も十七・八才で工事
のもつて担ぎをした記憶がある。
その当時三m道では馬車が大量
輸送の王さまであり、これに次ぐ
のが大八車であった。医者の往診
はもっぱら人力車で、これをひく
車夫ははねん股引き姿で威勢が
よかった。自転車はまだはやり初

めで乗る人も少なかった。えび茶
ばかまの女の先生がさっそうと乗
て行くのが珍しくモダンに見えた
ものである。
馬車で運ばれる荷物は木材と木
炭が筆頭で、帰りはわずかに石
灰や雑貨くらいで多くは空であっ
た。時には五台一〇台と馬車がつ
づき、道が狭いので轆が線路のよ
うに切れ込み、雨上りなど泥道が
深くなり馬は悪路にあせっていた。
また、馬糞の山が幾つも連らなっ
ていた。必死の思いで道端に片寄っ
ている歩行者に馬の鼻がふれるほ
どであった。
春は山草刈りの荷車がつづき、
秋は長い冬に備えての段木（割木）
やあえ（粗朶）をひく車、八幡あ
たりの地主へ納める年貢米を積み
出す車がつづいた。冬ともなると
雪が積ると馬糞が木炭や薪を積み
出した。春から夏にかけて道が乾
くと物すこい土ぼこりに悩まされ
た。今日のたんたんとして砥石の
ような舗装道路は正に極楽の道で
ある。

前述三m道路になる以前の模様
を故老に尋ねたら、昔の道は幅六
尺（二m弱）ほどで一〇尺（三m）
えの改修工事は日露戦争直後の明



現在の大間見の道

治四〇年（一九〇七）頃で、くね

くねと曲った坂道が至るところに

あって人も馬も大いに難渋した。

このときの改修によって一応今の

線形となり、大いに直線化された

模様で、当時の用水に添った魔道

敷が今も散見され、土地絵図の上

にも歴然とその面影を残している。

昔の大間見街道には峠を越えて小

間見に通ずる岩垣内や三ツ谷の線

もあった。この大間見街道は剣地

区の阿千葉城跡下の險阻を避けて

白山に通ずる主要道路であった、

慈顔を拝し、また字夕用の石崖淵
の大胡桃の根っこには童顔の地蔵
尊（享和元年）が立っている。一八〇

年ほど昔一人のごぜ（魁）がここ

を通りかかり、道上の山腹からの

大落石に打たれ、非運にも石諸共

淵に突き埋められたとの伝承があ

る。高さ六〜七mもある巨岩が路

傍の淵に突き刺さって、今なおそ

の悲劇を物語っている。この石に

耳をあてると三味線の音が川底か

ら聞こえて来るといので、幼い

ころこの石に耳をあててその音を

聞こうとしたものである。

ここは大間見街道の難所で、五

六年の豪雪のとき崩雪のため地蔵
尊は祠諸共に淵におし流された。
そのとき無残にもお顔は石で削ら
れて、おいたわしい姿になられた
が、衆生済度に今も立っておられ
る。ここにお立ちの地蔵尊のお顔
の損傷はこれが二度目で、その前
身は彫りかえられて今も小間見の
わなで峠にお立ちである。飛騨ま
で影が射したという杉の大木もこ
の近くの字大杉にあった。

大間見の草分け治郎助という者
が、那留村と牛の乗り合せで村境
を定めたという稗洞の道に伝わる
伝承もおもしろい。

今や「道」の近代的な工事によっ
て、大間見の顔が大きく変わろうと
している。石崖淵の悲劇以来この
大間見道には人身事故を聞かない
が、新しい県道にも地蔵尊でも立
ててご加護をお願いしたいもので
ある。

墓標の思い出

語り手 小池 柳二

聞き書き 久江

日露戦争が終って、明治三十九

年に戦死者の忠魂碑を建てると、

村の人達が石碑になる様な石を探

しておったんや、丁度、どんど橋

の下の大川で（剣の政エ門の下）

一つ見付けたんやけど、あんまり

形が良うなかったもんで、もう一

つ万場橋の上の方で見付けたんよ

それが今の忠魂碑や、先に上げ

た石が要らん様になつたもんで、
どんど橋を石橋にして大分のうち
使ってたんやけど、川巾が広
うなつて間に合はん様になつて、
長いうち土手にもたせかけてあつ
た。

俺等が子どもの時、まだ学校へ
行く前やで、明治四十二、三年頃

やろうか、その石の側にケヤケヤ
と云つたが、アネモネによう似た
赤い花が咲いて、その花が散つて
実になるとその実が丁度筆の様な
んや、白い長い毛がついておつた
で（オキナグサでないかと思う）
それを取つてつばをつけてねぶつ
ては、その石の上に何か書いて遊
んだことを覚えてる。

その石がなあ、何時の間にあそ

こまで行つたか知らんが、今の北

小学校の北側の門の前の石橋に
なつておつた。

大正、昭和の始め頃までこの石

は学校生徒の踏み台になつたわけ
や、朝夕、毎日どれだけの人が踏
んで通つたらうなあ。

やがて校門の前の道路が掘げら
れて北側の入口が無くなつて、こ

の石は又無用の長物として校庭の

銀杏の木の下に一寸した台が取つ
て横になつたまま、子どもんたの
遊び場になつておつたんや。

小島徳保校長の時（昭和十三、
四年頃）子どもが登つて遊ぶので
危いどうにかして欲しいって俺が
頼まれたが、大きい石やで一人で
はどうしようもないで側に大きい
穴を掘つて転し込んで埋めた。後

でわかる様に表面が見える様にし

て、長いこと土の中に埋められて
おつた石をもう十四、五年になる
かなあ、上剣の畑中家（注：孫惣
一族）の人達が墓標にしたいか
らつて、校長先生に話してその石
をもらったとか、細かいことは知
らんが、野田白都先生の筆跡で、
牛道の石屋さ横山菊治郎さが死ん
なれる二年位前やつたか、立派な
墓標が出来た。

俺は、この石のことを思うと、
人間の生き方と同じやと思う、人
間も苦勞せにや一人前になれん
で通るが、この石がしゃべれるも
のなら話したい、石も昔を思い出
して「俺の上に登つて遊んだ子
どもか年を取つたなあ、ケヤケ
ヤの実で俺の体を撫でんりして、
くすぐつたかたぞい」なんて
そんな声が聞えて来る様な気がす
る。

多くの人達に踏まれて来た石、
この石と遊んだ子ども達、やがて
陽の目を見ることになつた石が、
大勢の人達の手によつて、校庭か
ら掘り起こされ、立派な墓標にな
るまで、畑中家の方々はもちろん
のこと、それぞれの心の中にその
歴史が秘められている。石一つに

もこんな歴史がある。この石の気持になった時胸の熱くなるのを覚える。

文化財研修旅行に

仲間入りして

清水紀子

旅行の時は皆様方大変お世話になり、有難うございました。心からお礼申し上げます。体の不自由な私を親切にして下さいました皆様方のご厚意に報いたい意味も含めて誠につたない文章ではありますが私なりに感想を書いて見たいと思います。

出発の朝 空がどんよりと雲っいてお天気が少し心配でしたが六時少し過ぎ私達はバスに乗り込み、先の人達と一緒に乗りました。バスは所所とまりながら仲間の人達を乗せ一路奈良へと道を急ぎました。秋とはいえ、まだ紅葉狩りには少し早いようでしたが、緑の山の中などに点々と黄や朱を散らしたような眺めもよく、一面の紅葉も美しいけれど、そんな光景もまたよいものだと思いますがバスの旅を楽しんでいました。途中

バスの中で昼食のおべんとを食べそろそろバスに乗っているのに飽きた頃、奈良の都に入りました。一番初めに拝観したのが大安寺

の仏達でした。それぞれの仏達はそれぞれの趣きがありましたが、印象的だったのは楊柳観音像でした。特に怒りを表したそのお顔は印象に残りました。これまで私の知っている観音様は皆温和な顔の仏だったからです。いくら観音様

でも慈愛に満ちた顔ばかりでもいられません。邪悪の心に対しては怒りを以って相手に接するんだなあ……。そんな事を思いながら唐招提寺へと向いました。あの有名な鑑真和尚像には逢えませんでした。乾漆造りの盧舎那仏、千手観音、薬師如来など大きくて立派な仏達がいっぱいありました。又脇侍の仏達は等身大の大きさであると聞いたのですがとてもそんな大きさには見え

ませんでした。千手観音といっている観音様は千手千眼観音とい十一の顔と千手をもち千手の中に一眼をもっているということですからして一手が二十五の迷界を救うといわれています。それらの仏が安置されている。金銅の柱も大きくて立派なものでした。

もう少し時間があればよいのに思いながら西大寺へ向いました。ここには沢山の愛染明王がお



薬師寺本堂前にて

いでになりました。その中で写真で見せていただいた明王は特に立派でした。ただ残念だったのは、この明王が厨子の中に安置され少し暗かったものですからその美しいお姿がはっきりわからなかったことです。又同じ堂内に何でもない粗彫りの木の仏が飾ってあります。案内のお坊さんの話によりますと、これはあるお医者さんが造って納められた癌封じの薬師如来だということでした。私にはこの像も心に残りました。これまでに拝観してきた国宝や重文などの立派な仏達とは違い、何かとても身近かなものと思えたからです。境内の片隅に小さな庭園があり、池のそばに日影用の棚があります。その下にベンチが二つ並んでいてその一つに高校生らしい学生が一人坐って絵を画いていました。母達はもう少しその辺を見学してくるということで私はその隣りに坐り待っていることにしました。この境内は歩行道になっているのか、学生や親子連れなどの人々が沢山通り抜けて行きました。隣りの学生は絵を画き終えたのかどこかへ行ってしまうました。そうこうしているうちに母達も戻ってきて最

後の目的地秋篠寺へと急ぎました。伎芸天は矢張り素晴らしい像でした。ふっくらとした顔立ち、ちよっと首をかしげて下を見詰めたようなお姿はとても美しいものでした。頭部と体部は造られた年代が違うと聞いたのでどこでつないであるのかと思いましたが、拝観したのですが、そんな偉和感など少しもありませんでした。この伎芸天は天女だということですが女性にしては少し胸のふくらみがないような気がしました。

バスは夕方明るいうちに宿に着きました。その宿はとても古風な由緒のある家とかいって、これぞ本当の宿屋だと思いい興味深いものがあり、後々までの語り草になりました。私にとって今度の旅行は大変楽しく有意義な二日間でした。これも皆様方のお蔭だと思いい感謝しています。これからも何かとお世話になると思いますが、どうかよろしくお願いします。誠につたない文章で意をつくしませんが嬉しかったこの喜びを紙上を借りて心からのお礼と感謝の気持ちのべさせていたいただきました。本当に有難うございました。

奈良

鈴木 禾火

ゆく秋の愛染明王に色香あり
 秋篠や枝芸天女の木の葉髪
 観音の乳房裂けたり神無月
 吉祥天女指に秋日を結びけり
 月光のみ腰冬日となし給ふ
 唐招提寺出て甘酒の温み恋ふ
 蜘蛛網に落葉かかりぬ奈良の宿
 彩未だ雑魚寝の宿の鳥瓜
 つなぐ手の素直なりしか落葉道
 新米のひかりに朝の生玉子
 白鳳の裳階見上ぐる返り花
 まほろばや奈良の小路の冬構へ
 池冷ゆる博物館の通行人
 冬日射し斑鳩行のバスの尾

古都の思ひ出

水木 玲子

木津川の川床かわどの草ももみぢしぬ。
 秋のあはれを 水音にきき
 小ろ柿のたわわに垂りぬ、大和路
 の秋は熟れゆく色に深むも
 命つよし。アワダチ草の刈られて
 は尚伸び盛る 碧空に映え
 鳥瓜 己れ燃して枯やぶに赤き火
 と咲く矩か日おしみ
 空の色 碧きに映ゆるもみぢ葉の
 瞳にしみじみと 奈良の都は
 八百余の化仏と変り濟度さる。大
 きき仏に何をか祈らむ
 (唐招提寺盧舎那仏)
 九百を余りて五十三本の御手に救
 はる 衆生よわれも
 鬼なれば兵火にも焼かれず業き
 えず、なほも曝すか醜き姿
 (西大寺)
 秘仏なる愛染明王今しかと拝みま
 つる うすら明りに
 首や、に傾し仏の艶きに、女のわ
 れの胸のゆらめき
 粧ひの新らたなりたる薬師寺は満
 天の陽に きらめき渡る
 秋の陽を深々と吸ふ東塔の旧りに
 し色の畏こかりき

ふるさとの唄

加藤 一男

「唄の文化財」と申しましよう
 か、私たちの村にも古くから唄い
 継がれてきた里の唄がいくつもあ
 る。今回はその一つ「伊勢音頭」
 について少し述べてみます。
 伊勢は津でもつ
 津は伊勢でもつ
 尾張名古屋は城でもつ
 春は花の季節であるとともに、
 結婚の季節でもある。年輩の方な
 らば、結婚式といえはすぐ、この
 「伊勢音頭」を思い出されること
 でしょう。
 近年、結婚式を新郎家、新婦家
 合同で行うようになってからは、
 「伊勢音頭」をうたう機会もなくな
 り、この頃ではほとんどうたわ
 なくなつたが、式を自宅で行つて
 いた昭和四十年頃までは、心ずこ
 の唄がうたわれたものである。
 「伊勢音頭」がこの地方でうたわ
 れるようになったのはいつの頃か
 らか知らないが、お伊勢参りの旅
 人を慰めるため、伊勢地方で盛ん
 にうたわれていたものが、いつ、
 誰となくうたい伝えて来たものと

思われる。

めでたい唄ながら、どことなく
 哀調をおびたこの音頭、花嫁を送
 る側、迎える側、人々それぞれの
 思いをこめてうたいたい継がれて来た
 ものであろう、
 めでためたの若松様よ
 枝もしげれば 葉もしげる

七代天神社

鳥居杉の下にて

此島 広

永き世の生と死をここに見下ろせ
 の神杉は語る生者必滅

春 風

有代 信吾

命あり春陽に立ちて神の前
 御霊屋の一灯ゆらす涅槃ねはん西風
 筋扉に風の走りて二月尽く
 山裾の古刹にとまる春北風はるきたかぜ
 本堂の反りが落花を分かちけり
 篠脇の白の目壕の谷おぼろ

仏

河合 芳江

春なれや衆生濟度の仏たち
 観音の笑みの深さや霧晴れて
 九品ほん仏下品げほん下生げしょうや寒戻る
 春浅し身代わり仏の古き傷
 おかめ堂姿態さまさま春立ちぬ

まんさく

下広すゑ乃

初蝶の舞ひて丸山古墳かな
 まんさくの花の昏れゆく那比の里
 勸城寺跡の裏山しだ辛夷
 水音の春めく木戸口清水かな
 懸仏にぶき光りに涅槃西風

秋 日

田中まさを

思惟像に子も憑かれるて秋日濃し
 道祖神うつむきあひぬ露の旅
 印相へ紅葉の日差しねんごろに

昭和五十六年度 事業報告

四月二二日

○総会

於村民センター 四〇名出席
昭和五十五年度事業報告及び収支
決算承認、昭和五十六年度事業計
画及び収支予算承認、役員改選

○記念講演

「原始・古代の濃飛」

講師 大江傘先生

五月七日

○現地見学

名古屋市博物館における特別
展「南京博物院展」及び、岐阜
県博物館における特別展「美濃
の絵馬展」を見学。二七名参加

七月七日

○役員会

於村民センター 一六名出席
一、村内文化財見学「明建神社の
七日祭り」及び「東氏居館跡
発掘調査現地見学」について

二、臨時文化財見学、禅昌寺にお
ける「円空仏展」の見学
三、奈良方面文化財見学について

七月三十一日

○文化財現地見学 二六名参加

「岩谷ダム」(益田郡金山町)及
び禅昌寺(益田郡萩原町)にお
ける「円空仏展」を見学す。

八月七日

○村内文化財見学 参加一五名

「明建神社の七日祭り」を参拝
見学し、東氏居館跡発掘調査に
ついて現地見学す。

九月三〇日

○会報「文化財やまと」第六号
を発刊、会員に配付す。

十一月三〜四日

○奈良文化財見学 参加者三二名

第一日、大安寺・唐招提寺・西
大寺・秋篠寺を見学。

第二日、国立奈良博物館におけ
る「法隆寺献納金銅仏展」及び
薬師寺を見学する。

三月七日

○役員会

於村民センター 一七名出席
一、「文化財やまと」第七号原稿
募集について

二、会報表紙作成について

三、五七年度行事計画案について
四、三月役員会開催について
五、理事増員について

三月三〇日

○役員会

於村民センター 一八名出席

一、昭和五十六年度事業報告および
収支決算案について

二、昭和五七年度事業計画および
収支予算案について

三、昭和五七年度総会開催および
記念講演会について

三月三十一日

○会報「文化財やまと」第七号を
発刊

大和村における

指定文化財(県指定以上)

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

(一)名称、(二)員数、(三)所在地、
(四)指定年月日、(五)管理者

岐阜県指定天然記念物

(一)明建神社の社叢

(二)八七・三アール(明建神社境内
桜並木を含む)

(三)牧字妙見・大門下タ

(四)昭和五四年六月一五日

(五)明建神社

(二)土器類三二、玉類二二、金屬製
品一一、ほか破片多数

(三)徳永

(四)昭和五一年六月四日

(五)大和村教育委員会

(一)七鈴五獸鏡

(二)一点

(三)徳永字

(四)昭和五一年六月四日

(五)多賀神社(代表木島観一)

岐阜県指定無形民俗文化財

(一)明建神社の七日祭り

(二)奉仕者二九名

(三)牧字妙見

(四)昭和五一年六月四日

(五)明建神社

(村指定分は次号に紹介します)

次号原稿募集

一、見学記 八〇〇〜一〇〇〇字

二、文化財主材短歌 三〜五首

俳句 三〜五句

三、原稿〆切 五七年八月末日

発刊予定 〃 九月末日

宛先 文化財保護協会事務局

(大和村教育委員会内)

昭和五七年度

事業計画

- 一、会議
 - 総会の開催 四月二十五日
 - 役員会の開催 四・六・九
 - 一・三の各月及び臨時会
 - 常任委員会の開催 随時
 - 二、見学及び研修会
 - 文化財に関する講演会 四月二十五日
 - 郡内文化財の見学 五月下旬
 - 縄文展(名古屋市博物館特別展)の見学 七月
 - 京都及び滋賀県地方文化財の見学(一泊二日) 一〇月下旬
 - 本部主催研究会に参加
 - その他臨時文化財見学
 - 三、会報「文化財やまと」の発行
 - B五版八〜一〇ページ 二回
 - 各三〇〇部 九月・三月
- 土松 新逸
- こぶしの芽ふくらみあらん篠脇の
山想いつつ今宵きく雨
いち早く篠脇山に咲きいでしこぶ
しは光る午後の陽ざしに

昭和56年度会計報告

収入の部		決算額
1. 前年度繰越金		6,399 円
2. 年会費		256,000
3. 特別会費		633,000
4. 補助金		50,000
5. 諸収入		4,353
	計	949,752
支出の部		
1. 会議費		37,470
	総会費	6,500
	役員会費	30,970
2. 事業費		719,495
	研修費	653,495
	発行費	66,000
3. 需要費		54,900
	消耗品費	50,900
	通信費	4,000
4. 負担金		130,000
	計	941,865
	差引残次年度へ繰越	7,887

昭和57年度収支予算(案)

収入の部		予算額
1. 前年度繰越金		7,887 円
2. 年会費		260,000
3. 特別会費		600,000
4. 補助金		50,000
5. 諸収入		2,113
	計	920,000
支出の部		
1. 会議費		50,000
	総会費	20,000
	役員会費	30,000
2. 事業費		700,000
	研修費	630,000
	発行費	70,000
3. 需要費		30,000
	消耗品費	20,000
	通信費	10,000
4. 負担金		132,000
5. 予備費		8,000
	計	920,000

文化財の愛護者に
ご参加下さい

編集後記

○文化財は、祖先が残してくれた尊い大切な公共の財産です。わたくしたちの身近かなところにある数々の文化財を、みんなの力で護ってゆきましょう。

○大和村文化財保護協会が発足してから六年目をむかえ、会員も一三〇名を超えるようになりました。この際より多くの方に入会していただいて、本会の発展を期してゆきたいと思えます。

○本会会員は岐阜県文化財保護協会会員でもあって、会員には

- ・岐阜県文化財保護協会発行の「濃飛の文化財」(年二回)
- 及び特集「文化財美濃と飛騨」をお届けします。
- ・本会の会報「文化財やまと」(年二回)をお届けします。
- ・県本部主催の見学会・講演会研究会に参加できます。
- ・本会主催の文化財の見学その他の研究会・講演会等に参加できます。

○会員となるには、会費二〇〇〇円をそえて、事務局(大和村教育委員会内)または、地区の理事へ申し込んで下さい。

☆遅れ咲きの梅が山すそを明るくして、奥美濃もようやく春らしくなりました。

☆会報第七号をお届けします。今回は研究・随想・見学記・短歌・俳句など多くの玉稿のほかに、会員名簿等を載せましたので一〇ページをはるかに越しました。これも本会の発展を証するものと同慶にたえません。ご寄稿下さった皆様に厚くお礼申し上げます。

☆大和村の指定文化財は、新たに六件が加えられ四七件になりました。まだまだ数多くの文化財が私たちの周囲に残されていることと思えます。これらを私たちの総力でしっかりと護ってゆきましょう。

☆東氏居館跡の発掘調査も貴重な中世の庭園遺構が検出されて、いよいよこの発掘調査が意義あることに思われます。この尊い文化遺産を地元を持つ私たちは、一層自覚してこれを護ってゆきましょう。

☆追々農事に忙しい日が近付いて来ますが、皆様格別ご自愛のうえ生産にもお励み下さいませよう、ご健闘を祈念しまして後記といたします。

(土松記)